千歳音頭と支笏湖

守屋憲治
新千歳市史編集委員会専門部員

昨年（平成二十二年）の六月、北海道新聞の千歳地方版「サブロク探検」に「千歳音頭」が大きく取り上げられた。

空港や支笏湖歌い60年前制作
千歳音頭 復権の兆し　市 町内会などと連携、普及へ

【千歳】空港、支笏湖、樽前山など千歳の情緒を歌った千歳音頭が、復権の兆しを見せている。60年前に制作され、地域の祭りなどで盛んに踊られてきた歌の認知度は、時代の変化とともに年々低くなっているが、「貴重な郷土芸能を次世代に残そう」と、市などが新たな普及策を模索している（リード部）。

多くの市民が、歌は知っていても踊り方はわからないという千歳音頭。記事では、「『千歳の特徴が上手に織り込まれた魅力ある歌』というのが、千歳音頭に対する関係者の一致した評価。千歳市民の心をつなぐ郷土芸能に帰り咲くことが期待される」と結んでいる。

六〇年前ということは昭和二十五年に制作されたことになる。この年は札幌で初めての雪まつりが、苫小牧・王子製紙のリンクでは第五回国民体育大会冬季スケート競技会が開催された。千歳にあっては町立の千歳高等学校（S23道野幌高校千歳分校季節定時制→S25豊平町立月寒高校千歳分校）が開校した。朝鮮では動乱が勃発、政治的には共産主義への脅威から連合国軍最高司令官司令部（GHQ）の勧告によって共産党員等の公職追放＝レッドパージが行われた年でもあり、日本は未だ占領下にあった。

筆者は昭和五十年に遊学先から千歳に転入した。以来千歳に住んではいるが、多くの市民と同様に千歳音頭の歌詞は知っていても踊りを見たこともなく当然踊り方も知らない。歌詞と残された写真を手がかりに、これまで論じられることのなかった千歳音頭の来歴と謎について考察したい。

千歳音頭

千歳音頭の千歳における刊行物の初出は、昭和二十六年七月一日に創刊された二ページ立て千歳町弘（広）報『ちとせ』の一ページ中央に支笏湖の写真とともに歌詞が掲載された時である。『町勢要覧』にあっては同じ年の八月十五日発行の二十六年版からである。いずれにも作詞者、作曲者名は記されていない。三十四年版『要覧千歳』から「作詞　北郷雪夫、作曲東辰三」の名が見え（S33市制施行）、五十一年版『要覧ちとせ』には「昭和25年9月制定」と記載されていた（平成三年版から千歳音頭削除）。

千歳音頭に関して昭和二十五年当時の資料として写真三葉とクラフトジャケットに納まった「苫小牧シャンソン」とのカップリングレコード一枚の四点が市史資料として保存されている。当時のジャケットは盤面中央のレーベルが見られるように中心部を丸くくり抜いたもので固有のデザインではなかった。

写真の裏書には万年筆で次の記述がある（ルビ引用者）。

「〝千歳音頭〟〝苫小牧歌謡〟発表会　踊るは苫小牧の妓（ねえ）さん達」（表紙写真（大））

「苫小牧の妓さんによる千歳音頭の発表会」（写真1）

「〝千歳音頭〟発表会」（写真2）

全葉に「25．9．23．於支笏湖畔[1]　道新寄贈」と記してあり、発表会が秋分の日（旧・秋季皇霊祭）の昭和二十五年九月二十三日（土曜）に支笏

写真１　苫小牧の芸妓による千歳音頭の披露

湖畔において苫小牧歌謡発表会として行われ、北海道新聞の記者が撮影したことがわかる。

表紙写真（大）、写真1を見ると、恵庭岳を望むボート乗り場附近（旧・バス停留場）に「苫小牧歌謡発表会千歳音頭」の吊看板を掲げた特設舞台で踊りを披露する苫小牧花柳界の芸妓が写っている。写真2で踊りを披露しているセーラー服とジャンパースカートの女子生徒は、苫小牧市博物館に調査を依頼したところ制服から苫小牧東中、弥生中などの中学生だということがわかった。

ただ、写真を見て、なぜ苫小牧歌謡発表会が支笏湖畔で行われ、どうして苫小牧の女子中学生と芸妓が千歳音頭を踊っているのかは謎だった。

レコードは割れているため試聴することができない。昭和二十五年の発売であるため、レコードはSP10インチ盤78回転・モノフォニック録音である。レコード会社は日本ビクターで、千歳音頭（品番PR1068‐PE1142）と苫小牧シャンソン（PR1068‐PE1141）がカップリングされている。品番から千歳音頭がB面ということがわかる。B面中央のレーベルには品番のほか、「千歳観光協会選定　懸賞募集当選歌」「北郷雪夫作詞 東辰三作曲／東辰三補作詞 小沢直与志編曲」「市丸 鈴木正夫／日本ビクター合唱団」「著作権者 日本ビクター株式会社 横浜」と記されている。当該レコードは自費制作であり経費の記録も残っていないが、昭和二十五年当時SP盤の販売価格は一枚一七〇円程度だった。

写真２　千歳音頭を披露する苫小牧東中などの女子生徒
舞台の上にビクターのペナントと提灯が揺れる
（写真１、２　昭和25年９月23日　支笏湖畔
北海新聞社撮影）

千歳市街で千歳音頭が初めて披露されたのは、（旧）日本航空の札幌千歳線試験機マーチン2‐0‐2・N93043「もく星」が飛来した昭和二十六年十月二十三日の民間航空千歳空港開設祝賀会と思われる。なお、開設祝賀会は苫小牧市と札幌市の後援を得て実施された。『志古津』第13号に拙筆「民間航空・千歳空港開設」において次のように記述した。

特設舞台では余興として苫小牧観光協会による〝千歳音頭〟と〝苫小牧シャンソン〟の唄と踊りが、一五名の苫小牧花柳界の芸妓によって披露された。前年に選定され「銀のネ　銀の翼が世界をつなぐ・・・」と空港を歌い込んだ千歳音頭の歌詞が具現化した日となった。

苫小牧民報２００５（平成17）年５月７日付「町からまちへ」に千歳音頭に関して次の記事が掲載された。

「苫小牧シャンソン」と「千歳音頭」

SP盤レコードなぜ？

２ご当地ソングが一枚に　新冠町レ・コード館も「珍しい」

新冠町レ・コード館で1枚のSP盤レコードが見つかった。「苫小牧シャ

ンソン」と「千歳音頭」がカップリングされている。（略）なぜ苫小牧市と千歳市の歌が一枚のレコードになったのかは分からない。（略）

同館では、道内の「ご当地ソング」を展示している。六十七万枚を超える所蔵のレコードを調査していた職員が見つけた。（略）

苫小牧市立中央図書館に、「苫小牧シャンソン」のレコードは保存されているが、「苫小牧音頭」とのカップリングで、「千歳音頭とのレコードはありません」。千歳市には一枚保存されている。でも「割れているので聴くことはできません」と言う。（略）

ほぼ同時期に観光振興を目的に製作された二曲で、「なぜ二曲が一枚のレコードになったかは分からない」という。同館では、このレコードを蓄音機で聴くことができる。（後略）

千歳音頭はこれまでに発行された『千歳市史（S44）』『増補千歳市史（S58）』のいずれにも全く触れられていない。これは前述の四点の資料のみでは著述のしようもなかったことが主因と思われる。

先ず、支笏湖が国立公園に指定されたことに伴う観光協会の設立、支笏湖と苫小牧の関係などから論じていきたい。

註（1）「湖畔」という地名（町名）は昭和二十六年五月一日に、現在の「支笏湖温泉」は六十一年四月二十日に施行された。

支笏湖の自然保護と観光宣伝

明治四十一年に山線と呼ばれた王子製紙苫小牧工場専用鉄道が苫小牧‐支笏湖畔間に開通した。専用鉄道であったため王子製紙従業員とその関係者以外の便乗は許されていなかったが、大正十一年四月から一般の乗車が許可された。支笏湖の大自然が少しずつ知られ人々を魅了するようになり、姫鱒（ヒメマス）（チップ）釣りも一部の愛好家のものではなくなりつつあった。宿泊施設としては四年に（新）丸駒温泉旅館が開業、釣り人や恵庭岳登山旅行者の便に供した。

大正十一年から昭和五年まで王子製紙が漁業権を有したヒメマスの保護と育成を目的とした支笏湖保勝会という組織があり、会長には支笏湖の谷本亀（ひさし）が就任、理事は王子製紙苫小牧工場、帝室林野局札幌出張所などの役職であった。保勝会は漁獲がなくなり一時期休止状態にあったが、昭和七年に二代目村長山田旦を会長に活動が再生、副会長には初代会長であり、村会議員でもあった谷本亀が就任した。

昭和十一年に道央で第三四回陸軍特別大演習が実施され、秩父宮雍仁（ちちぶのみややすひと）親王（しんのう）、朝香宮鳩彦王（あさかのみややすひこおう）のほか多くの高官が苫小牧経由で支笏湖を訪れた（翌年、根志越橋左岸に「野外統監部御跡」碑を建立、市内に現存する）。

支笏湖保勝会は、昭和十三年から支笏湖姫鱒保護協力会へと発展、支笏湖の保全と宣伝に努めたが、訪れる観光客は少なく昭和九年当時で年間一万人程度であったという。

戦前から道央地区の支笏湖を含む名勝地を国立公園にする運動があったが成就することはなかった。敗戦の翌年、昭和二十一年五月、定山渓観光協会長であった豊平町長小須田治朗が定山渓、登別、支笏湖、洞爺湖周辺の市町村と国鉄札幌鉄道管理局、日本交通公社、札幌観光協会などを定山渓の章月旅館（現・章月グランドホテル）に集め道南国立公園指定促進期成会を立ち上げた。設立総会の席上、期成会の名称「道南」を「北海道」とし七月に北海道選出代議士を紹介議員とし衆議院に請願し十月に採択となった。

この当時、烏柵舞（ウサクマイ）の支笏湖地区を苫小牧の行政区域に編入する運動が再燃したが、『千歳市史』には「どうしてこの期になって、苫小牧からこのような請願が出されたか不明であるが、不思議ですらある。もしかする

と国立公園の声が高くなったことが、原因しているかと思われるほどである」と編著者であった詩人の更科源蔵は述べている。

昭和二十三年十二月に「支笏洞爺」は国立公園に内定、翌年二月には厚生省の最終現地調査があり、五月十六日に厚生省告示第八四号として国立公園に指定された（指定運動については『千歳市史』『新千歳市史 通史編上巻（H22）』を参照されたい）。

当時の支笏湖がどのように紹介されていたのか、昭和二十三年版『千歳町要覧』に見てみよう（数値は全てママ。ルビ、文字補正は引用者）。

（支笏湖）樽前岳―恵庭岳の間に眠る神秘の湖がそれである。周囲32・5KM、深度410M（1350尺）海抜275M（850尺）の高標に水を湛える噴火湖であって海面より高いこと152M（500尺）その水色深碧清燈（ママ）4

（四）時連峰の色に映じ、幽邃（ゆうすい）正に神秘の境である。

湖には支笏湖孵化場放流のヒメ鱒、鮒、アメ鱒を産し毎年6月1日から好人釣遊が盛んであるしボートを浮かべるもよく湖上周遊も佳である。

支笏湖はエメラルドグリーンで透明度が高く、四季を通じて美しい神秘の湖であり、釣魚とともに湖上周遊に良いというばかりである（現公表値・周囲＝約四〇キロ、水深（深度）三二八〇メートル、海抜二四八メートル）。

観光ホテルと観光協会の設立

支笏湖畔には皇族の宿泊施設である王子製紙の倶楽部支笏湖別邸（通称・支笏湖倶楽部）と旅館翠明閣（現・レイクサイドVILLA翠明閣）平成二十年から丸駒温泉旅館経営）があったが、昭和二十二年から米軍に接収され将校用厚生施設「サービスセンター」となった。このため旅行者が支笏湖畔で宿泊できる施設がなくなり、臨時の小規模なものを建設したが収容人数も少なく利便も悪かった。

昭和二十三年四月一日苫小牧は人口三万三千人で市制を施行、九月には商工会議所が設立された。その直後に経済界から支笏湖畔にホテル建設の機運が高まり、千歳の経済界にも呼びかけがあった。発起人は、苫小牧から菱中興業（旧・中村組／S23商号改称）の大沢辰雄、駅前・渡辺待合の渡辺広継、駅前通×王子正門通・旅館富士館の先田秀吉、一条通・中嶋呉服店の中嶋誠次ら有志八名、千歳からは伊藤木材の伊藤弘、山三渡部商店の渡部栄蔵、千歳郵便局長中川秀男を始めとする二一人だった。資本金は三百万円で苫小牧、千歳ともに百五十万円を負担した。苫小牧経済界のホテル建設構想は、支笏湖の国立公園指定を見越したものだった。この当時、将来の空港を夢見る千歳の人口は一万五千人に過ぎず経済界の規模も小さかった。出資者数も苫小牧の八人に対して千歳は二一人を数えた。

昭和二十四年三月二十四日、千歳町において支笏湖観光株式会社の設立総会が開催された。社長には王子製紙苫小牧工場（S24・8王子製紙（財閥解体）→苫小牧製紙・十條製紙・本州製紙、苫小牧製紙→S27王子製紙工業→S35王子製紙、H8本州製紙合併）の庶務課長大木祐三が選出され、常務には千歳の伊藤弘（S29・8社長就任）、渡部栄蔵、中川秀男らが、苫小牧からも同人数が常務に選ばれた。本社は千歳町川北（現・錦町）の伊藤木材内に、支社を苫小牧市表町に置いた。主な事業として、観光ホテルの経営、温泉利用事業、水産養殖事業とこれに付帯する一切の事業とされた。

すぐに支笏湖観光ホテル[1]の建設が始まった。五月に着工し、八月一日に開業した。本館は約四〇〇平方メートル（一二〇坪五合）の規模だった。客室数、収容人数については詳らかではないが、一五室・五〇名程度と思われる。宿泊料は一泊八〇〇円、部屋使用料は五〇円で軽飲食を提供する談話室＝パーラーも併設されていた。

写真３　支笏湖観光ホテル玄関
昭和33年には100畳敷き大宴会場、３階建て客室が増築された
（昭和30年代中期　支笏湖観光ホテルパンフレットから転載）

ホテルの建設は苫小牧と千歳両経済界の協調によるもので、まさに千歳音頭誕生の序章でもあった。

支笏湖観光ホテルが着工する前月の二十七日、札幌市中央公民館で関係者が集まり支笏湖開発座談会が開かれ、支笏湖畔にホテルの建設、遊覧船の建造などが話し合われていた。ホテルの建設は的を射たものだった。

昭和二十四年五月十六日に支笏湖が国立公園に指定された。指定に先立つ十日には千歳に観光協会が設立され（S45改組→観光連盟）、会長には町長の山崎友吉、副会長には町議会議長で支笏湖観光常務の渡部栄蔵が選ばれ、事務局は町役場産業課商工係内に置いた。

九月十日にはB6判四七ページ（本文三六ページ）に及ぶ初の観光小冊子（パンフレット）『観光の千歳 - 国立公園の支笏湖』が発行され、本文巻末に町の代表監査委員川合新三郎（T15 - 千歳着陸場造成時村長）が作詞した北海音頭の替え歌である「千歳音頭」[2]の歌詞が掲載された。

十二月十日には苫小牧にも観光協会が設立された。会長には日本通運苫小牧支店長の西浜小三郎、副会長には先田秀吉という陣容だった。

このように千歳と苫小牧は支笏湖を介して協調関係にあり、市制を敷いた苫小牧は民間主導、人口規模が小さかった千歳は行政主導という違いはあったにせよ国立公園支笏湖を背景に観光協会もほぼ同時期に設立された。

この当時、支笏湖畔には支笏湖姫鱒保護協力会を発展させた支笏湖観光協会があった。会長職には支笏湖保勝会長であった谷本亀が就いていた。千歳観光協会は支笏湖観光協会が発展したとされている[3]が昭和二十五年当時は両協会が並立し、支笏湖観光協会は観光宣伝に比し支笏湖の保全に主眼を置いていたと思われる。なお、谷本亀は千歳観光協会の理事にも就いていた。

註（1）支笏湖観光ホテル（客室数六二、収容人員四〇〇）は平成二十年四月二十六日から鶴雅観光開発が運営した。十一月三日から全面改装のため休業、翌年五月十五日に新たに滞在型リゾートホテル「しこつ湖鶴雅リゾートスパ水の詞（うた）（客室数五三、収容人員一九九）」としてオープンした。

註（2）千歳観光連盟は平成十六年五月に開催された創立五五周年記念交流会の席上、パワーポイントで北郷版千歳音頭発表会の写真に川合版千歳音頭の歌詞を重ねて紹介した。「１９４９年（昭和24年）観光資料『観光の千歳』発行　千歳・支笏湖の観光宣伝として『千歳音頭』製作（引用一部略）　ハァ～♪ミドリシタタルミヤノモリ～♪／コケノハナサクギョウザイショ～♪／ハァ～♪ヨイノスズミハ千歳カワ～♪／ヨイヤコラサ～　ヤンサノエ～／ハァ　飛行機ニギオウ　千歳マチ～♪」なお、ギョウザイショ＝行在所は誤読で正しくは「あんざいしょ（行幸時の仮住まい＝千歳においては明治天皇行幸時の新保旅館を指す）」と読む（川合版歌詞はひらがな漢字交じり）。二番以降に今はなき長都沼、剣淵（ケタフチ）温泉などが歌い込まれている。

註（3）丸駒温泉旅館発行『原始の森と湖に…』第3章 - 座談会に「多分、そ

の辺の観光関係をとりまとめていたのが千歳観光協会だったのでしょうが、これははじめは支笏湖観光協会といっていましたね」との記述がある。

支笏湖と苫小牧

昭和二十年代中期に千歳と苫小牧が国立公園支笏湖を介して協調関係にあったことは先述したが、苫小牧は王子製紙が操業を始めた明治期から支笏湖と密接な関係を持っていた。

支笏湖は全域が千歳町の行政区域内にあったが、支笏湖への最も有力な交通手段は王子製紙が千歳川水力発電所建設のため敷設した山線だった。

王子製紙苫小牧工場裏手の山線苫小牧駅から二時間ほどで支笏湖畔に着いた。また、支笏湖地区を含む孵化場以西＝烏柵舞の治安も明治の終わりごろ王子製紙の費用負担による請願巡査が第一発電所附近に支笏湖巡査駐在所として置かれ、千歳の烏柵舞村西方は苫小牧警察署の管轄であった（昭和十四年、千歳鉱山にも苫小牧警察署請願巡査が草笛に配置された）。さらに、水明郷にあった烏柵舞特別教授所の教育体制に不満を感じた同社は、大正六年から私立王子尋常小学校、十二年からは尋常高等小学校を経営した（S6移管・千歳村烏柵舞尋常高等小学校）。このようなことから大正八年には烏柵舞地区を苫小牧の行政区域とするよう「行政区画変更ノ義ニ付請願」が北海道庁長官に提出される騒動があった（昭和二十年にも行政区画問題が再燃）。

苫小牧では皇族・高官の来苫（らいせん）があった場合、支笏湖観光を計画するのが常であった。そのため、皇族が宿泊する総檜造りの豪奢な支笏湖倶楽部は貴賓館の役目をもって大正五年に建てられ、山線には貴賓車も用意された。別邸建設の発端は七年に閑院宮載仁親王（かんいんのみやことひとしんのう）の来道が予定され、その宿舎として建設したものであった。別邸完成の二年後、七年八月二十五日に閑院宮同妃若宮が御宿泊されている。

別邸は大正十一年七月に皇太子（後の昭和天皇）が天皇の摂政として支笏湖に行啓した際に休憩所として利用されたほか、七年の閑院宮から昭和二十年八月の清宮貴子内親王（すがのみやたかこないしんのう）（後の島津貴子）まで戦前戦中において一九回の御宿泊があった（昭和天皇と香淳皇后の御宿泊は昭和三十六年と四十三年／別邸は昭和三十五年に現在の商店街南西にあったものが現在地（温泉街北端）に移築され、四十三年には昭和天皇をお迎えするため新館が建築された）。

翌明閣は支笏湖と千歳川上流部の水利権者である王子製紙が、大正初期に苫小牧工場山林部関係者の宿泊施設として建設、昭和十一年から請負業者中村組が王子関係者と一般旅行者の用に供するため受託経営していた。

支笏湖の国立公園化にいち早く反応したのが苫小牧だった。

山線が廃止となる一年前の昭和二十五年八月二十四日、苫小牧市営バス（市営バス）が開業した日に山線と並行する形で支笏湖産業道路（現・国道276号）が米軍払い下げの重機によって竣工、翌日から市営バスが一日四往復（含・不定期一往復）運行した。支笏湖線＝苫小牧駅前‐支笏湖畔の所要時間は四十五分だった。市営バスは開業当初三両（後に五両）のボンネット車両があったが、支笏湖線には唯一のロマンスカーが割り当てられた。観光が産業として発展する幕開けの時で、この路線は多くの苫小牧市民が観光と保養に貸切利用するところとなり市営バスのドル箱路線となった。

市営バス支笏湖線は冬期運休したが産業道路は支笏湖観光の動脈と位置づけられた。昭和二十八年八月からはモラップ（＝モーラップ、本論では「モラップ」に統一）線を運行、モラップキャンプ場に船でなければ行けなかったキャンパーを支笏湖畔からバスで運んだ（三十四年からは樽前登

山線のほか苫小牧・千歳線＝苫小牧駅前‐千歳空港‐千歳市本町（千歳橋附近）を運行）。

このように王子製紙が苫小牧で創業以来、支笏湖畔は苫小牧の奥座敷としての色彩が濃く、苫小牧の人々も支笏湖を行政域の延長として捉えていた。また、支笏湖地区に住む人々も日々の買い物、子弟の高校進学などは苫小牧に重きを置き、苫小牧駅前には日帰りができない千歳鉱山関係者の宿泊施設もあった。

支笏湖周辺の千歳域内における苫小牧市の観光施設等は次のとおり（供用順）。

・苫小牧市営バス路線（昭和二十五年開設～平成五年譲渡）
・苫小牧市営モラップ休憩所「樽前荘」（昭和二十七年開設）
・国有林野内モラップキャンプ場（昭和二十四年北海道開設、三十三年‐千歳市（苫小牧市共同運営）～平成九年環境省所管休暇村支笏湖運営）苫小牧市の関与については不詳
・苫小牧市道樽前山登山観光道路（昭和三十二年開設／道道１４１号（樽前錦岡線）‐ヒュッテ）
・苫小牧市営樽前山七合目ヒュッテ（昭和三十四年開設）
・苫小牧市樽前山七合目駐車場（昭和三十四年開設）
・国設モラップ山スキー場（昭和三十八年開設～平成三年休止・十七年廃止／千歳市、苫小牧市共同運営）
・支笏湖バスターミナル（苫小牧市、北海道中央バス共同出資／昭和四十年供用～平成十二年廃止）

宣伝用レコードの作製

苫小牧観光協会が発行した『30年のあゆみ　とまこまい観光の年輪』に道南産業観光社代表の長桶鎌吉が記した「協会の生いたちと港まつり」にレコード制作に関する記述があり、千歳音頭の端緒がわかる。

（略）昭和24年5月9日待望の支笏湖、定山渓、洞爺湖を含む〝支笏洞爺国立公園〟が指定されている。（略）（昭和25年）いよいよ観光事業に一歩を染めると第二弾として取り上げたのは観光宣伝用としてのレコードの作製であった。（略）先ず苫小牧側から当時支笏湖観光協会長（千歳には千歳市と支笏湖に観光協会があった）、千歳市観光協会長中川氏（当時郵便局長）の両氏に相談の結果、待ってましたとばかりの大賛同により、早速歌詞の公募とともにレコード会社と交渉を進め、キングレコードで吹き込み、第1回の観光まつりの前夜祭にこれを披露発表し、市民に愛誦された。

歌詞の募集について『南北海』[1]によると、昭和二十五年七月初旬に苫小牧、千歳両観光協会は歌詞の募集を始めたことがわかる。当初、募集曲名は苫小牧歌謡、支笏湖音頭としていた。後援として苫小牧市、千歳町、南北海新聞社が名を連ねた。当選作はレコードに吹き込み、苫小牧市長賞、千歳町長賞として賞金一万円が授与されるというものであった。賞金は大卒公務員の初任給二ヵ月分に相当する高額なものであった。応募作品の締め切りは七月三十一日で、送付先は苫小牧観光協会とされた。

七月末までに苫小牧歌謡が一二八

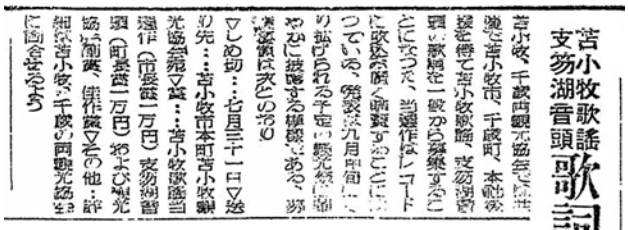
苫小牧歌謡
支笏湖音頭
歌詞を募集

写真４　支笏湖音頭の歌詞募集記事
千歳音頭は当初、支笏湖音頭として歌詞を募集した
（昭和25年７月９日付　『南北海』２面）

篇、支笏湖音頭が一〇一篇の応募があり両観光協会で一次審査を行い、数篇を横浜・守屋町の日本ビクターに送付したのが八月四日のことだった。

この時点で千歳観光協会の募集した曲名が「支笏湖音頭」から「千歳音頭」に変わった。

八月二十七日付『南北海』二面に歌詞が決った経過が掲載されている。

苫小牧シャンソン千歳音頭　歌詞決る

支笏洞爺国立公園指定を記念し苫小牧、千歳両観光協会で一般から公募した苫小牧歌謡と千歳音頭は既報の通り両協会で代表作数篇をビクターレコード会社に送つたがこのほど両歌詞とも稚内市北郷雪夫氏の歌詞を補作して決定をみた苫小牧歌謡は苫小牧シャンソンとして吉川静雄氏が補作、歌手は宇都宮清、生田惠子の両氏、千歳音頭は東辰三氏補作、歌手は市丸、鈴木正夫の両氏でレコードは九月四日ごろ一千枚が到着二十二日から行われる観光祭りには二十一日の前夜祭に市役所前で盛大な発表会を行うことになつている、なお北郷雪夫氏は室蘭音頭[2]の作詞家である

苫小牧シャンソン　北郷雪夫作詞／吉川静雄補作／吉田正作[ママ]

①ぱらり開いた扇カ浦に　並ぶマストを波が呼ぶ
　出船入船かもめも唄う　海のふるさと苫小牧苫小牧

新冠町のレ・コード館で見つかった苫小牧と千歳の歌が一枚のレコードになった理由は、国立公園所在地として観光宣伝用レコードを苫小牧観光協会が発案、千歳観光協会と共同して制作したものだとわかった。

「苫小牧歌謡」という曲名で歌詞を募集するのも理解に苦しむものがあるが、「シャンソン」とは仏語で「歌謡」の意である。昭和二十五年九月に支笏湖畔で撮影された写真にある特設舞台の看板「苫小牧歌謡発表会千歳音頭」の苫小牧歌謡とは苫小牧シャンソンと読むことがわかった。

レコードは、苫小牧では一条通り伊藤ラジオ店と三条通りの齋藤時計店で、千歳では室蘭街道沿い錦町一丁目（八天庵南二軒隣）の博信堂で発売された。

『南北海』の記事には千歳音頭の歌詞が掲載されていないので紹介したい。

千歳音頭　北郷雪夫作詞／東辰三補作詞／東辰三作曲／小沢直与志編曲

①銀のネ　銀の翼が世界をつなぐ　ヨイヨイ（繰り返し）
　空の港も　ひらけて晴れて
　今日もあちらの　今日もあちらの
　ホイホイホイ（繰り返し）　お客様
　　ソレ　チトセヨイトコ
　　アリャリャン　リャン
　　シコツ　ヨイヨイ　ヨーイヤナ（繰り返し）

②招くネ　招く支笏湖　樽前山は　燃えてひとすじ　千歳の契
　情海より　情海より　まだ深い

③木影ネ　木影すずしいモラップあたりファイヤかこんだ　キャンプの村で
　若い血潮も　若い血潮も　又燃える

④ダムのネ　ダムのしぶきにしっぽり濡れて　届く思いに　散らした紅葉
　胸に灯ともす　胸に灯ともす　発電所

⑤美笛ネ　美笛鉱山に黄金が湧いて　月の丸駒　湯もやの中で
　好いた同志の　好いた同志の　桜色

⑥孵化場[3]ネ　孵化場娘の気だてに育て　お洒落姫ます　湖くらし
　誰が釣るやら　誰が釣るやら　恋の味

作詞の北郷雪夫は稚内在住と記事にあるが、「北郷雪夫」とは北の郷＝稚内と雪をもじったペンネームで本名は福田清、職業は新聞記者で読売新聞社札幌支局稚内通信部に勤めていた（福田清の詳細、調査するも不

明）。

作曲・補作詞の東辰三（M33～S25）は、戦時歌謡「荒鷲の歌（S15♪見たか銀翼この勇姿・・・）」や平野愛子が歌う戦後の大ヒット曲「港が見える丘（S22♪あなたと二人で来た丘は　港が見える丘・・・）」を作詞・作曲した昭和前期のヒットメーカーとして知られる。千歳音頭を作曲したほぼ一ヵ月後の九月二十七日に五〇歳の若さで病死した。千歳音頭は東の遺作ともいうべき最晩年の作品となった（赤い鳥「翼をください」、由紀さおり「夜明けのスキャット」、キャンディーズ「あなたに夢中」で知られる作詞家山上路夫は東の子息）。

歌はうぐいす芸者としてヒット曲を連発した市丸（M39～H9）と初期のNHK紅白歌合戦に五回出場した民謡歌手鈴木正夫(M33～S36)で、当時のスーパースターによるデュエットとなった。

なお、千歳観光協会は北郷に対して千歳町長賞として一万円を贈ったが、選定曲の歌詞について千歳観光協会に帰属することを明示しなかったことから著作権は北郷が有した。著作権の概念が乏しかった当時としてはやむを得ないことだった。また、千歳音頭は『要覧ちとせ』に「昭和二十五年九月制定」と記載されていたが、八月二十七日付『南北海』の記事から歌詞が決まったのは八月だということがわかる。九月は支笏湖畔における発表会開催月で資料として残されている写真の裏書を引用した誤りだった。レーベルを参考に「千歳観光協会選定」とすべきであった。

千歳観光協会は昭和二十四年に川合新三郎作詞の千歳音頭、二十五年には北郷雪夫が作詞した千歳音頭、ということで二年続けて同名の音頭を世に出したことになる。

川合版千歳音頭は観光パンフレット発行にあたって役場（観光協会）内において急遽作られた替え歌であり、当然レコード化も成されていない。「支笏湖音頭（＝千歳音頭）」の歌詞公募に当たって観光協会として川合版には重きを置くことはなかった。川合版は歌われることもなく、僅か一年足らずで北郷版に千歳初のご当地ソングの座を譲ったということになる。

註（1）南北海新聞社による昭和二十五年一月十五日創刊の日刊紙で、二十六年九月一日から『苫小牧民報』（二十七年一月一日・商号「苫小牧民報社」）に改題した。三十八年七月二十日から『千歳民報』を発行する。

註（2）「♪ハァ　伸びる室蘭　伸びる室蘭　世界の波止場　出船入船ソレ宝船・・・」で始まる室蘭音頭は昭和二十五年に室蘭商工会議所が公募によって作った曲で、「暁に祈る」「イヨマンテの夜」の伊藤久雄と「トンコ節」の久保幸江が歌った。

註（3）蘭越の北海道水産ふ化場千歳支場（現・水産総合研究センター千歳さけます事業所）をさすものではなく支笏湖孵化場（現・千歳市支笏湖ヒメマスふ化場）を歌っている。

千歳音頭の歌詞

ここまで千歳音頭ができあがる背景を記述してきた。

ここでは、歌詞に関する疑問を考察してみたい。

一番の歌詞「銀のネ　銀の翼が世界をつなぐ　空の港も　ひらけて晴れて・・・」と空港・民間航空を連想する歌詞と前述の支笏湖畔における写真の日付（昭和二十五年九月二十三日）に違和感を覚える。なぜなら、千歳音頭の歌詞を募集した二十五年七月はGHQからの航空禁止令（二十年十一月二十八日発出SCAPIN（スキャッピン）（連合国軍最高司令官覚書）301＝民間航空活動の全面禁止に関する指令）が発令中だった。歌詞募集直前の六月二十六日に、その年の一月一日において日本上空を飛行することが認め

られていた外国航空会社七社が共同で運行する一社に限って国内航空輸送を許可するといったＳＣＡＰＩＮ２１０６（日本国内航空輸送事業運営に関する覚書）を日本政府に通達したばかりだった。

ＳＣＡＰＩＮ２１０６を受け日本国内航空（ＪＤＡＣ）が設立されるのは昭和二十五年末のことで、札幌丘珠との熾烈な空港誘致合戦の結果、千歳飛行場が北海道空港に指定されたのは早くとも昭和二十六年の五月頃と思われるからである（『志古津』第13号「民間航空・千歳空港開設」を参照されたい）。国内航空の展望が未だ開けず、千歳飛行場にＪＤＡＣが就航する確証がなかった二十五年七月に「銀のネ　銀の翼が世界をつなぐ・・・」の歌詞がどのようにして思い浮かんだのだろうか。

次に、二番以降の歌詞に支笏湖周辺の見所が列挙され、その歌詞は五番に代表される「月の丸駒　湯もやの中で　好いた同志の　桜色」などと、俗っぽい歌詞が並び一番の歌詞との違和感があるのはなぜなのだろうか。

この二つの疑問について筆者の推論を述べたい。

当初、千歳観光協会は歌詞の募集に当たって支笏湖音頭の曲名で作品を募集した。しかし、観光協会は歌詞が支笏湖周辺の見所ばかりに限定したのでは市街地における音頭の普及・広がりに期待が持てないという不安を感じた。このため募集終了後に曲名を千歳音頭に変更、日本ビクターに飛行場に夢を託した歌詞を新たに付け加えることを依頼したのではないかと考えた。このことがレーベルにある「東辰三補作詞」の意味か。この場合、二番以降が北郷雪夫によるオリジナルの歌詞となる。

だが、先述の観光パンフレット『観光の千歳 - 国立公園の支笏湖』中 - 千歳町のほこり - （四）交通―「特に飛行機について」に「この点で千歳町は、アメリカのノウスウエスト（ママ）会社国際航空港として確認されている」とある。これはＳＣＡＰＩＮ２１０６が通達される以前、ノースウエスト航空（ＮＷＡ）の大圏航路・ニューヨーク - アラスカ経由東京 - マニラ線が航続距離の関係から千歳におけるテクニカルランディング（給油寄港／乗降なし）の計画があったのだろうか。北郷雪夫の職業が新聞記者であり、ＮＷＡの件を聞き及び飛行場の将来性を歌詞に託したことも否定できないが、そうだとすると二番以降の歌詞の違和感が整理できなくなる。いずれにしても、苫小牧観光協会、千歳観光連盟ともに一次審査を通過し日本ビクターに送付した歌詞控は保存がなく、今となっては確かめようもない。

苫小牧観光まつりと苫小牧歌謡発表会

昭和二十五年七月三十一日から苫小牧地方に降り出した雨は、翌日までに総雨量四四七・九ミリに達した。死者一人、負傷者一一人の人的被害のほか、家屋被害は流出一五戸、床上浸水一五三〇戸、床下浸水四〇七五戸に達した。敗戦から五年、ようやく日々の生活が安定してきたなかでの自然災害で人々の落胆は大きかった。

苫小牧の経済圏を拡大するために計画されていた「観光まつり」[1]は水害による人心の安寧策を兼ね、九月二十一日の前夜祭に引続き三日間にわたって勇払街道と新川通りの交点にあった苫小牧市役所（後に旧・市立総合病院／現・教育・福祉センター（本幸町））前広場を会場に開催された。

『南北海』から千歳音頭に関する記事を見てみよう。

九月十三日付

第一回苫小牧観光祭迫る

盛大に打上げ花火　商店街の協力態勢もＯＫ

二十一日から繰りひろげられる『観光祭』は苫小牧初の試みとして観光協会、

市役所、会議所が一体となつて豪華な『おまつりプロ』を計画（略）外来客誘致と苫小牧市および支笏湖の宣伝との目的には相当役立つものとみられる(略)

▽まず多彩な行事部のプログラムによれば二十一日の前夜祭には午後六時から市役所広場で五間に十間の大舞台を使用して待望の〝苫小牧シャンソン、千才(ママ)音頭〟のレコード発表会が目下振付中の踊りとともに華やかにフタをあける

（略）苫小牧シャンソンの発表を目的とする移動演芸班が錦岡、勇払と巡回、二十三日には支笏湖に現われるスケジュールが組まれている（後略）

千歳音頭のデビューは千歳ではなく、苫小牧の観光まつり会場において昭和二十五年九月二十一日のことだった。さらに、「千歳音頭」の項で述べた九月二十三日撮影の写真‐なぜ苫小牧歌謡発表会が千歳の支笏湖畔で行われ、苫小牧の女子中学生と芸妓が千歳音頭を踊っているのだろうかという疑問は、観光まつりのＰＲと苫小牧歌謡(シャンソン)の発表を目的とする移動演芸班[2]が支笏湖畔で、苫小牧歌謡とともに千歳音頭を披露している写真だということがわかった。

特設会場の吊看板が「苫小牧歌謡発表会千歳音頭」となっているが不自然な文字配置である。本来は「苫小牧歌謡千歳音頭発表会」とすべきで、苫小牧市郊外の錦岡、勇払で用いた看板「苫小牧歌謡発表会」に「千歳音頭」の文字を継ぎ足して支笏湖畔において再利用したと考えられる。会場では日本通運苫小牧の社員で構成される楽団ニュー日通の演奏もあった。

移動演芸班が錦岡と勇払に引き続いて支笏湖畔を訪れたのは、支笏湖畔が苫小牧の奥座敷＝行政域の延長との考えを如実に物語るものである。

九月二十三日付『南北海』には観光まつり前夜祭の様子が掲載され記事中「引続いて花柳流千葉栄一氏の〝苫小牧シャンソン〟の踊り方、さらに花柳界のお姐さんによるシャンソン、千才(ママ)音頭の踊りの発表が舞台一ぱいに手さばきもあざやかに行われ・・・」とある。この記事と十三日付記事「目下振付中」から千歳音頭の振り付けが舞踊家千葉英一によってなされたものと推測できる。[3]

註（1）昭和三十一年からは、苫小牧港実現の見通しが明るくなったことからまつりの名称を「港まつり」に改め現在に至っている。なお、苫小牧港の開港は光輝丸、第三北星丸が入船した三十八年四月のことだった。

註（2）観光まつりが港まつりと名を変えた後もキャラバン隊が近隣市町を巡回した。千歳においても平成七年まで市役所正面でキャラバン隊の女性が浴衣姿で「苫小牧おどり（♪踊りゆかたは太平洋の　波の模様が　いちばん似合う・・・）」を披露し港まつりをＰＲした。

註（3）昭和三十四年制定の千歳市讃歌パンフレットに千歳音頭の振付図が紹介され、振り付けは札幌日の丸舞踊会・工藤倉子となっている。

レ・コード館

本論執筆中に日高管内新冠町レ・コード館を訪れ、平成十七年五月に苫小牧民報の記事に取り上げられた〝千歳音頭〟と〝苫小牧シャンソン〟をレ・コードホールで試聴する機会を得た。

レコードのジャケットは失われていた。レコードはＳＰ10インチ盤でシングル盤（7インチ・一七(チセン)）に比べて直径が二五(チセン)と大きいが78回転であるため収録時間が短く、録音されていた千歳音頭は一番から四番までであった。「宣伝用レコードの作製」の項の千歳音頭の歌詞、一番がデュエット、二番、四番が市丸のソロとなっていた。また、苫小牧シャンソンは一番、三番、四番が録音されていた。

なお、新冠町はアナログレコードを‐音楽文化を記録した歴史遺産‐として後世に伝えることでまちづくりを進め、平成九年にレ・コード館を建設し現在七八万枚以上のレコードを収集している。

次項の「もう一枚の千歳音頭」＝「千歳行進曲」のほか、千歳を舞台とした旧作であるフランク永井の「札幌発最終便（S32♪・・・胸に始動のプロペラ悲し　札幌発ああ最終便）」、東英行とカルチナの「千歳ブルース（S45頃♪霧に隠れた滑走路　今日は来るかと待ってた人よ・・・）」などの収蔵はなかった。

もう一枚の「千歳音頭」

千歳音頭に関して昭和二十五年当時の資料として写真三葉と〝苫小牧シャンソン〟とのカップリングレコード一枚の四点が保存されていることは先述した。このほかに、千歳行進曲とカップリングのピクチャーレコードが保存されている。絵柄は支笏湖と恵庭岳のカラー写真となっている。

千歳行進曲　坂口　淳作詞　飯田　信夫作編曲

一、千歳の流れも　清らかに　日毎に伸びる　わが街よ
　支笏をのぞみて　繚乱と　文化の華は　ここに咲く
　千歳　千歳　躍進の　一路をたどる　わが郷土（二、略）
三、千歳と世界を一すじに　結ぶは　空の日航機
　弾丸道路も素晴らしく　平和の盾は　自衛隊
　千歳　千歳　栄光の　輝き満ちし　わが郷土

千歳音頭がA面ならば、千歳音頭制作時からの人口急増でレコードの需要が増えたといえるがそうではない。レコード制作の目的は千歳行進曲を世に出すことにあったが、その理由については判然としない。

千歳行進曲の作詞は「小鹿のバンビ（♪小鹿のバンビはかわいいな・・・）」の坂口淳、作編曲は映画音楽の飯田信夫、歌手は国民的歌手・指揮者として国民栄誉賞を受賞した藤山一郎（M44～H5）だった。レコードには曲名のほか、当代の売れっ子三人の名前とビクターオーケストラとのみ記載され制作会社名がない。

その間の事情を博信堂の松森聰は「千歳行進曲のレコードは、ビクターの役員と懇意だった社長の自主制作盤と聞いています。私が入社した昭和四十五年当時、倉庫には五〇枚ほどの千歳行進曲がありました。レコードは買い取りなどしませんから・・・。懇意にした関係から、以前はよく店の前でビクターの歌手がキャンペーンを張ったものです」と述懐した。

自主制作盤のためか千歳行進曲はJASRAC（ジャスラック）（日本音楽著作権協会）の作品データベースに登録がない。

制作年は不明となっている。千歳行進曲の歌詞をヒントに制作年を類推したい。

三番の歌詞に「自衛隊」と出てくる。防衛二法が公布され保安隊が自衛隊に改組されたのは昭和二十九年七月である。さらに「日航機」も出てくる。日本ヘリコプター輸送（現・ANA）の千歳就航は同じ年の八月であった。当時、日本ヘリコプター輸送は小規模な航空会社であったが、就航した後であれば日本航空のみを歌詞に登場させることはないであろうと考えると、「もう一枚の千歳音頭」の制作は就航前の七月となる。また、国際線を有する日本航空を特記したと仮定し、ある程度の幅をもたせると人口が急増した三十年前後となろう（S29住基

写真５　ピクチャーレコード・もう一枚の「千歳音頭」
Ａ面「千歳行進曲」も同じ支笏湖と恵庭岳の絵柄

三二、九四二、S30国調四二、三二七)。なお、国道36号・札幌‐千歳間の通称だったアスファルト舗装「弾丸道路(定山渓鉄道豊平駅踏切‐千歳橋)」は二十八年十一月の竣工である。

支笏湖湖水まつり事始

支笏湖畔におけるイベントも苫小牧との協調によって始まった。

前出の長桶鎌吉が支笏湖観光のイベントについて記している(「苫小牧の観光開発とその周辺」/( )内引用者補筆)。

(略)支笏湖が国立公園の指定区域になったことにより、支笏湖をもっと内外に売り出そうということから、支笏湖観光協会、千歳観光協会、苫小牧(観光協会)の三者によって〝支笏(湖)湖水まつり〟をやろうじゃないかと当時の千歳市役所の産業課長の米田(忠雄/後の市長、道議)さん(略)から相談をうけ、三者の意見がまとまり、昭和29年6月26、27日の二日間支笏湖畔で行われている。

内容のほとんどが苫小牧市と苫小牧(観光協会)が主体となり華々しく開幕、NHKの協賛行事(NHKのど自慢素人演芸会/現・NHKのど自慢)や苫小牧花柳界の姐さんたちによる踊りが披露されている。

2回、3回と数回共催したあと、米田さんが千歳市役所を辞められてから、湖水まつりは苫小牧からはなれて今日に至っている。

湖水まつりも千歳と苫小牧の観光協会の協調によって始まった。

湖水まつりは支笏湖に夏を告げるイベントとして定着、主催は支笏湖まつり実行委員会、千歳市と千歳観光連盟が後援となってコンサートや納涼花火大会などが催されている。昨年(平成二十二年)は七月三十一日、八月一日の二日間にわたって第六〇回支笏湖湖水まつりが開催された。六〇回とすると初回は支笏湖が国立公園に指定された翌年の昭和二十六年となるが、第一回支笏湖湖水まつりの資料は千歳観光連盟においても見出せないという。米田忠雄は三十年四月に町長選挙出馬のため町役場を自己都合退職している。米田の退職年と長桶の回想にある「数回共催」を勘案すると湖水まつりは二十六年初回の蓋然性が高い。

写真6　第1回支笏湖湖水まつりで踊られる千歳音頭
日本は占領下にあり観客に私服姿の米兵がみえる
(昭和26年　湖畔　苫小牧観光協会提供)

湖水まつりのほかにも苫小牧観光協会では昭和三十一年からモラップキャンプ場においてキャンプファイヤーを囲んだ「湖畔の夕べ」を開催、後に千歳市主催の「モラップキャンプまつり」の嚆矢となった。

千歳音頭の普及活動と現状(あとがき)

千歳音頭はJASRACの作品データベースに「内国作品　作品コード052‐7559‐8　タイトル千歳音頭　著作者北郷雪夫」と登録されている。作品の管理信託状況について北郷はJASRACに著作権管理を委託せず、東辰三の著作権については死後五〇年の経過によって平成十二年に消滅した。

昭和五十四年に挙行された千歳開基(現・開庁)百年記念式典では会場となった青葉陸上競技場において七五〇人の市民が千歳音頭の踊りの輪を広げた。昭和四十五年頃までは幸町一丁目やグリーンベルト(現・わんぱ

く広場）などの盆踊り会場では早い時間帯に子どもを含む市民のために千歳音頭が踊られ、夜が更けてからは大人盆踊りとして北海盆踊りを楽しんだ。各町内会の広場においても千歳音頭が踊られ、一部においては終始千歳音頭という町内会もあったという。このようなことから市民にとっても千歳音頭は身近なものだった。さらに、一部の小学校の運動会でも千歳音頭が踊られていた。このことは異動を伴う教員が地域の踊りを覚え、児童に踊りを教えるという地道な活動があったのだろう。

昭和五十年から始まった商店街振興組合連合会（市民夏まつり実行委員会）主催の千歳市民夏まつりのフィナーレを飾る市民納涼盆踊り大会のパレードでは北海盆踊りが採用され、千歳音頭が踊られることはなかった。五十八年には千歳市制定ふるさと音頭保存会が組織されご当地音頭・千歳音頭の復活に努めたが、保存会の活動が実を結ぶことはなかった。

平成七年十二月、千歳市女性団体協議会（女性協）が市民文化センターにおいて開催した‐女性の手による地域づくり推進事業「知っていますか、千歳の今昔物語」‐において千歳音頭が久しぶりに踊られた。参加者の多くが千歳音頭を懐かしみ復活の機運が盛り上がった。保存会も再編され講習会も開催されるに至り、翌年の市民納涼盆踊り大会で千歳音頭は復活した。

現在も大会期間中、街頭にはリズミカルな千歳音頭が流れる。夕刻から始まるグリーンベルトの盆踊り会場では、北海盆踊りの前座として短い時間が千歳音頭に与えられているが、踊り方を知らないのか参加する市民の数は多くはない。

なぜ、千歳音頭が廃れてしまったのだろうか。

千歳は自衛隊、工業団地進出企業、航空関連企業と転勤族が多いことで知られる。ご当地の踊りである千歳音頭は、飛行機や樽前山などの形を現すため振り付けが難しく、また、前に進んではさがるといった踊りが市内を練り歩くパレード向きではなかったことも災いしたのだろうと踊りを知る者はいう。このことから転入した市民が踊りの輪に参加することができず、踊り方が簡単で、かつ全道的に知られている北海盆踊りが定着したものと考えられる。

苫小牧においても、千歳音頭と一緒に作られた苫小牧シャンソンの踊りがパレード向きでないという理由から昭和三十五年の第五回港まつりにあわせて行進しながら踊れる「苫小牧音頭（♪山は樽前　男は気前　乙女心は苫小牧・・・）」が、さらに四十五年には港まつり市民おどりパレードのために「苫小牧おどり」が作られた。

平成二十三年二月十日付ＷＥＢみんぽう（苫小牧民報）‐千歳・恵庭のニュースに次の記事が掲載された。

千歳北栄小で千歳音頭体験

千歳北栄小（四方正校長）で9日、千歳音頭体験会が開かれた。普及に努めている千歳毎床会（若崎舞邦会主）が講師を務め、子供たちに伝統の踊りを伝えた。

千歳毎床会の会員3人が、放課後子ども教室「わくわく広場（ママ）北栄っ子」（毎週水曜日）を訪ねた。参加児童55人、ボランティア12人も体験した。

樽前山や恵庭岳、飛行機も登場する千歳らしいユニークな振り付けを、分かりやすく手ほどきした。3年の大寺利香さんは「子ども盆踊りは踊ったことがあるけど、千歳音頭は初めて。難しかった」と感想を話していた。

放課後子ども教室を担当する市教育委員会では、「時間も三〇分と短く子ども達の興味を引いたかは分からないが、事情が許せば夏まつり前にもう一度時間を採りたい。延いては子どもたちが夏まつりの千歳音頭の輪に入ってくれたならば普及に一役買うことになるのだが」という（わくわく

ひろばでは七月二十日にも児童八〇人が千歳音頭を習った)。

千歳毎床会のほか、長年にわたって千歳音頭の普及に係わってきた女性協の地道な活動が波紋となり、一部町内会等では復活しつつある。

千歳市老人クラブ連合会(市老連)も今年(平成二十三年)になって取り組みを始めた。五月二十六日に開かれた市老連主催の会員芸能チャリティショーのフィナーレにおいて、市民文化センター大ホールの舞台いっぱいに和服姿の女性を中心に四〇人以上の会員による千歳音頭が披露された。曲は録音時間が短い市丸と鈴木が歌うオリジナルなものではなく、千歳の民謡団体・千鳥会の莖津お江んと坂野ハル子が六番までの歌詞をフルに歌うものだった[1]。筆者は初めて目にした千歳独自の踊りに感動すら覚えた。踊りは振り付けを少しアレンジしたのか、結構前に進むものだと感じた。市老連ではちとせタウンネットの協力を得て、今年の町内会盆踊り大会での復活を狙っている。

いつの日か、以前のように明るい曲調の千歳音頭に合わせた踊りの輪がまち全体に広がることを願い本論を閉じたい。

註(1)音源は昭和五十四年の開基百年記念式典で千歳音頭を踊るために作られたもので、踊りが途切れないよう三〇分間ほどエンドレスで吹き込まれた。演奏は陸上自衛隊第七師団第七音楽隊が全面的に協力した。現在、市内に流れる千歳音頭は、この時のテープがルーツとなっている。

引用・参考文献

苫小牧市『苫小牧市史　下巻』　昭和五十一年／『苫小牧のあゆみ - 市制五〇周年記念』　平成十年
苫小牧観光協会『30年のあゆみ　とまこまい観光の年輪』　昭和五十五年
高橋長助『国立公園支笏湖沿革史』草稿　昭和四十七年
室蘭市『新室蘭市史　第6巻』　平成十九年
千歳市『千歳市史』　昭和四十四年／『要覧ちとせ』　各年
丸駒温泉旅館『原始の森と湖に…支笏湖丸駒温泉旅館80年』　平成七年
『北海道新聞』／『南北海』『苫小牧民報』『千歳民報』
千歳町・千歳観光協会　支笏湖関連各種パンフレット

協力

苫小牧観光協会
苫小牧市
苫小牧市博物館(苫小牧市教育委員会)
レ・コード館(新冠町教育委員会)
博信堂(松森聰)
苫小牧民報社報道部
坂野ハル子(千歳市)
ちとせタウンネット
千歳市老人クラブ連合会
千歳観光連盟

『新千歳市史　通史編上巻』好評発売中

各分野の研究者32名と一機関の執筆による
新たな視点による「新たな千歳市史」

千歳の自然や気候、先史時代から終戦までの歴史を詳述しています。

A4判全1，026ページ、箱ケース入り、一冊3，500円

市役所総務課で販売しているほか、郵送でも購入できます。

郵送の場合、送付先（住所、氏名、電話番号）を明記し、本体代金と郵送料（道内800円、東北1，000円、そのほか1，150円）を現金又は定額小為替でお送りください。

申込先は、

〒066-8686　千歳市東雲町2丁目34

千歳市総務部総務課文書統計係